

## 難聴児の特異な行動

——感音性高度難聴児達の記録——

足利市立相生小学校 本島一男

### はじめに

難聴学級は、県内に小中あわせて11学級が設置されている。難聴学級に在籍しながら、一日に1～2時間を難聴学級の教室で学習する。そのほかの時間は、通常学級で過ごすことになる。このようなシステムを校内通級制と呼んでいる。栃木県に限らず、他県においてもこのような通級制の方式をとっているところが多い。難聴児の成長発達にとり集団生活が、人格を形成するのに最も都合が良いためであろう。

聽覚に障害を持つ児童に対して、通常学級ではなかなかゆきとどかない部分を補うための学級である。指導内容は、次のようにある。

- ・通常学級の国語、算数の2教科を中心に1対1を原則にして授業をする。学習のつまずきを少しでも取り除くように指導する。
- ・補聴器の適正なフィッティングを図り、不明瞭な発音は直していくように訓練する。また、障害が重くてことばでの指導だけでは不十分な児童には、指文字の指導も同時に行う。
- ・通常学級への訪問や学級担任との話し合いを必要に応じてとりながら、情報の交換や問題点を話し合う。

難聴児は、障害の程度により大きく二つに分けられる。外耳道の閉鎖や耳小骨の形や機能が異常な伝音難聴と内耳や聴神経に異常のある、感音難聴がある。本校に在籍している児童はいずれも感音難聴児である。感音難聴児の指導実践を大きく2つに分けて載せている。前半は、入学当初から十分な耳の訓練ができずにことばが全くといっていいほど出でていない児童の様子である。難聴児というと、一人一人によって障害に大きな差がある。聞こえ方がよくない児童ほど早い時期（難聴であることが発見された年齢）から音（生活音、音声など）を聞いたり、正しく話すことばで答えるといった、訓練が必要になってくる。こういったことが、十分にできないまま就学してしまったケースである。後半は、コミュニケーションがとれる、感音難聴児の記録である。難聴児の障害の様子が少しでも分かるように、オーディオグラムと一緒に載せている。数値が大きくなるほどよく聞こえない。ちなみに、聴力障害を持たない健聴児の場合は、0デシベル（dB）前後の音を聞きとることができる。

難聴学級に入って来る児童は、障害が一段と重度化の傾向を示している。それだけに障害をもつ児童に対して今後さらにどのような指導をしていったらよいのか非常に難しい問題が多い。今回、難聴児の実践指導の歩みをここに載せることで、数多くの先生方に難聴児の様子を知っていただきご指導いただければこれからの指導に大いに役立つのではないだろうか。

## 1 コミュニケーションがとれないA児

A児は感音性高度難聴児である。オージオグラムからもわかるように、高音部が聞き取りにくい現在（6年生）では、一音一音の明瞭度はよくなっているが、ことばの表出はほとんどみられない。従って、ことばを通してのコミュニケーションはとれていらない。指文字を使うことはできるために教科指導には取り入れて指導しているが、教科の遅れを解消するまでにはいたっていない。通常学級の中では、適応状態も良好である。

### ★ オージオグラム（純音聴力図）

横軸に周波数 (Hz)、縦軸にデシベル (dB) の数値がある。0 デシベルは、正常な人の耳に聞える最小の音の平均である。数値が大きくなるほど聞こえ方はよくない。○-○は右耳×-×は左耳の測定結果である。なお、このオージオグラムは補聴器をはずして測定したものである。

#### (1) 低学年の頃の様子

##### ア 学校を抜け出す

早朝から教室を抜け出し、自宅近くにあるスーパーマーケットの当りをふらつくという行動がみられた。その原因は、忘れものをして、学校まで送ってくれた父親の後を追いかけて行ったことによるものであった。本人は、悪びれた様子は全くなく、連れてこられたときも平然としていた。

\* 学級担任とも協力して、今後無断で学校を抜け出さないように指導していくことで共通理解をえる。障害を持つ低学年の児童には、十分な配慮が健聴児以上に必要になることをあらためて考えさせられた。

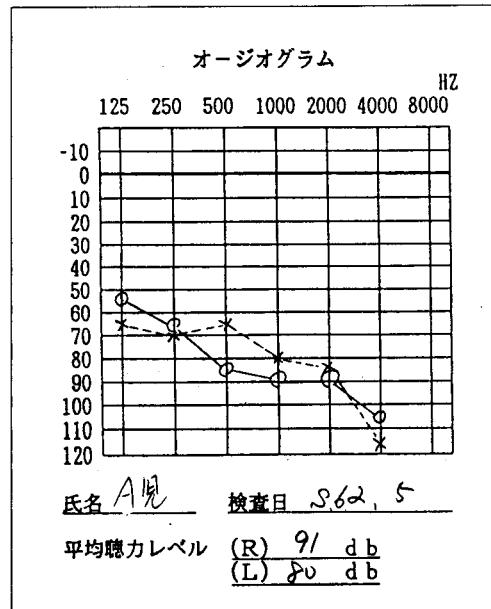
##### イ ことばが育たないことを心配する母親

「補聴器を付けたのだから、ことばが出てくるのにいつになんでも出てこないのはどうしたことだろう。」このような考えをしている母親である。

補聴器を耳に付ければことばが自動的に出てくるというように考え方をしているようだ。補聴器はたんに外界の全ての音を同じように増幅させるだけのものである。ことばと直接結び付けるには、無理がある。ことばを表出させるには、補聴器を装用しての聴能訓練が非常に重要になってくる。就学前より補聴器を装用しての指導がなされていれば、就学してもこのような問題はなかったのではないだろうか。

##### ウ コミュニケーションがとれない

自分からコミュニケーションをとろうと、友達にことばをなげかける姿がみられる。A児は入学児に比べ意識が随分変わってきた。しかし、意味不明な発声のために、友達は真



劍に聞こうとはしない。そんなとき、意思が通じないことでイライラして、相手を叩くという行動に出てしまうことがみられた。

\* 意味不明なことばが徐々に出てきていることは、ことばの面では大きな前進である。

しかし、そのことが原因となって、相手とトラブルを起こすことは決してよいことではない。その都度、両者の仲介役に入り互いの誤解を取り除くように努めた。障害を持つA児の場合、こういった小さなトラブルでも十分に気をつけて指導してやらないと、成長したときに、歪んだ人格を形成しかねない。教師がどれだけ手を差しのべてやれるかが重要なことになる。この頃のA児の語い数はきわめて少ない。通常学級の担任は「この子はことばが話せるのですか。」という疑問をなんとなくぶつけてきた。表出している語いは、おそらく10前後と考えられる。それでも低学年の後半にはやっと友達の名前が言えるようになった。

## (2) 中学年頃のようす

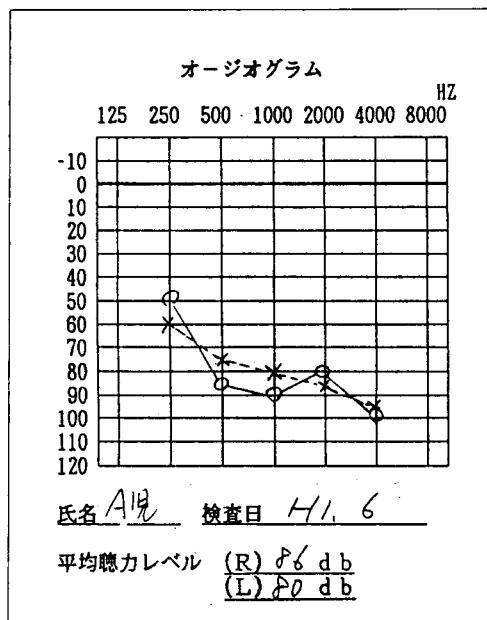
この頃になっても、まだ補聴器を付けることができない。ボックス型の補聴器は、机の中に入ったままになっている。きこえの教室にやってくるときだけ付けるということが、何度もみられた。

中学年になるとさすがに学校を飛び出すというような行動は姿を消した。通常学級での適応状態も一段とよくなってきた。しかし、コミュニケーションがうまくとれないために、ちょっとしたことでトラブルを起こしてしまうことがあった。教科面での遅れは、入学当初より続いているが、指文字を併用させながら指導を続けることによって、理解力が増してきた。右の図はA児のオージオグラムである。低学年の時とほとんど変わっていない。

### ア 指文字を導入

口話（音声を使ってコミュニケーションをとる方法）は非常に難しいA児だけに、指文字を併用させながらの聴能訓練は、時間の経つのも忘れて一生懸命に取り組んだ。A児の父親が指文字に大変興味を持ち、家庭においても訓練をしてくれた。

この段階から、ひらがなよりむしろ漢字に対して興味を持ち始める。クラスの友達の名前を（姓の部分）紙に書くようになる。文字に対して興味が強くなってきた。そこで、ワープロでカナ入力の方法を教えたところ、その効果が徐々に出てきた。表出言語の数が増えことばの明瞭度もよくなってきた。しかし、母音化（カと発音しているのにアの音になってしまうこと）傾向はすぐには、改善されなかった。



無声摩擦音（サ、ソ、セ、ス、シなどの音）もうまく発声できないようであった。まだ時間が必要なA児である。

#### イ A児の表出言語

日常生活において、A児の場合はほとんど耳からことばをいれることはできない。友達とのやりとりも大半が身ぶり手ぶりで行っている。

A児の数少ない表出言語を調べてみるとつきのようであった。

「センセイ、トイレ、バカ、マッタ、ナイ、オカネ、オハヨウ、ハイ、パパ、ママ、テツヤ、アリガトウ、オネガイシマス、マル、アタリ」

数は決して多くないが、

不明瞭なりにも相手に対して意識して使っていることばである。まだA児は一単語=一語文の段階から次のステップへ進んでいないようだ。

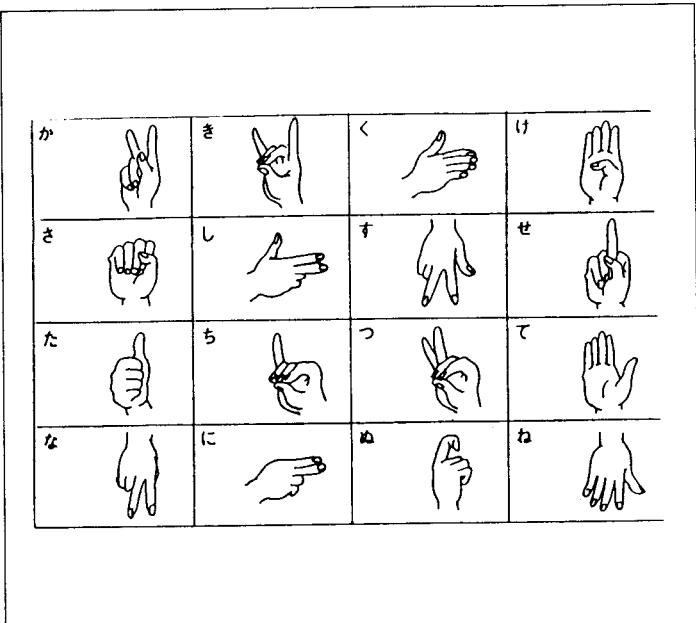
語いの発達を考えてみると、個人差はあるにせよ1.0~1.2歳代ということになってくる。

#### ウ A児の日常生活での理解言語

次に示すことばは、A児が理解していると考えられることばである。しかし、表出言語として会話の中には全くと言っていいほど出てこない。こちらから意図的に誘導してやることでからうじて応答してくれたことばである。

[ミカン、バナナ、リンゴ、ラーメン、ゴハン、ツクエ、ミソラーメン、テレビ、デンキ、デンワ、イス、エンピツ、ケシゴム、ホン、ボール、ヤキュウ、ズボン、アシ、クツシタ、メ、ハナ、クチ、ミミ、テ、トケイ、アタマ、カミ、ネコ、イヌ、ウシ、カエル、カメ、ビデオ、クレヨン、コクゴ、リカ、シャカイ、サンスウ、タイイク、ハサミ、ノリ、クモリ、ハレ、アメ、ユキ、コオリ、ゴクウ、ピッコロ、アカ、アオ、ミドリ、キイロ、クロ、シロ、ウタ、ミズ、クツ、コーヒー、オレンジ、スーパーマリオ、メダル、クルマ、トケイ]

こういったことばが出てきたが、この他にもかなり多くのことばを獲得していると考えられる。



指文字表（相手方からみた形）

## エ A児の漢字の理解度（3学年までの範囲）

中学年段階でのA児の漢字力はどの程度まで定着しているのだろうか。難聴児の中でもコミュニケーションがとれないA児の場合の調査を実施した。

第1学年の内容 73／76 (正答率 96%)

誤り・・・章、村、力

第2学年の内容 123／145 (正答率 85%)

誤り・・・玉、原、止、寺、弱、首、少、秋、  
多、台など

第3学年の内容 70／195 (正答率 36%)

誤り・・・安、暗、意、員、院、屋、界、去、  
業、庫など

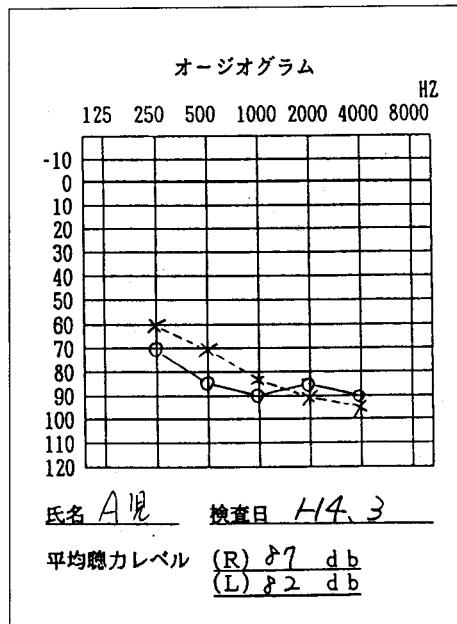
調査は、A児が漢字を正しく読めるかまたは書けた場合についてのみ正解とした。第1学年のところでは、「章→クサ」「村→ハヤシ」「力→カ」というように理解していた。このように形が似た漢字をいつまでも誤った状態で理解している。聴力に障害を持つことによって修正される機会が少ないのだろうか。学年が進むにつれて正答率は低下傾向にある。

## (3) 高学年の頃の様子

### ア 同学年の友達と遊べない

クラスの友達とのコミュニケーションがうまくとれなくなってきた。休み時間には低学年の子供とドッヂボールをやっている。同学年の友達と一緒に遊ばせようとするがすぐにやめてしまって、低学年の方に入ってしまう。

\* 高学年になるにつれて子供達は、豊富な語いを使ってことば遊びをやっている。A児は、この中にあって行けない。そこで、ことばをそう多く必要としない低学年の遊びの集団に入っていったようだ。



## 2 コミュニケーションがとれる難聴児

コミュニケーション能力の違いは個人によって違いは相当ある。しかし、就学前より聴能訓練を受けてきたことによって対人関係もA児とは随分違つてきている。

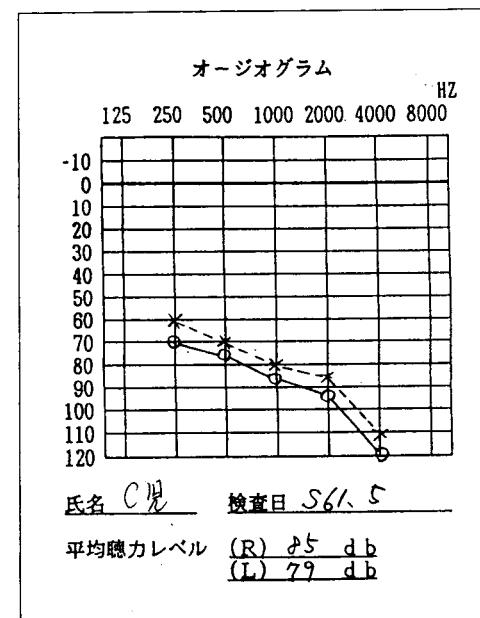
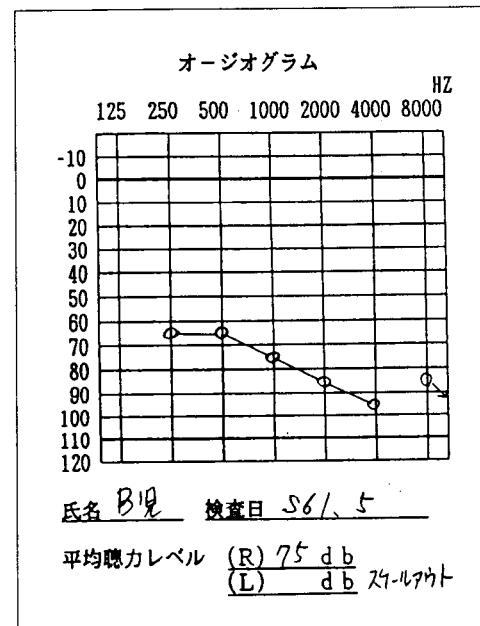
(1) 3人の子供達の入学当時の様子

ア B児は本校に入学する以前よりろう学校幼稚部で3年間の指導を受けている。当時、同じ幼稚部には、あと4人（女1人、男3人）が在籍していた。そこで聴能訓練などをしていた。その中の一人の女の子が後になって出てくるD児である。B児は、幼稚部での3年間、唯一ことばがはなせる難聴児として生活していた。いつもクラスのリーダーとして他の仲間から信頼され、常に先頭を切って何でも取り組んでいたようである。そのせいか、自分がいつもリーダーでいたいという気持ちがこの頃から益々強くなってきたと思われる。B児のオージオグラムからも分かるように、右耳の聴力が75デシベル、左耳の聴力は測定できない状態である。

入学した頃は、あまりにも早口で話すために、なかなかことばの意味が理解できず聞き返すことが何度もあった。とにかく、一方的にしゃべりまくるという感じである。こちらの考え方を聞こうという姿勢は全く見られない児童であった。このとき、B児は両耳ともボックス型の補聴器を使用していた。)

イ C児はろう学校の幼稚部へは行かず、市内の保育園と難聴学級に通級して就学前では聴能訓練を受けている。性格は、穏やかで物静かな児童であった。この頃のC児は、ことばの表出はきわめて少なく、声も弱々しく感じられた。単語を断片的に並べてやっと話せる程度で、聞き取りにくいところが随分見られた。このことからも、コミュニケーションはあまり自身がない様子であった。

C児は、非常に素直で言われたことはたいへんによく守り、きちんと最後までやり通すという素晴らしい一面を入学した頃より持っていた。オージオグラムからも分かるように左右とも聴力は厳しい。このレベルの状態では、人の肉声を聞き取り理解するのは大変である。(C児も両耳にボックス型の補聴器を使用していた。)



ウ D児はB児と一緒にろう学校の幼稚部で指導を受けている。入学当初は、表情も明るく元気な女の子であったが、ことばは全くと言つていはど出でていない状態であった。しかし、一音一音はかなりきれいな発音をしていた。自ら発する声が自分の耳に届いていないようであった。コミュニケーションはほとんどやりたがらないようであった。

オージオグラムからは、左右の聴力レベルがそれぞれ右79dB、左63dBとそれほど厳しい様子はみられない。この聴力レベルからみて、ことばがほとんど出でていないのは残念である。(D児も両耳にボックス型の補聴器を使用していた)

この頃は、母親自身も子供の話すことばが十分に理解できないことが日に何度もあったといふ。現在のことを話しているときは、おおよそ見当がつくが、過去、未来のことについてはほとんど当てずっぽうで答えなければならないことが多いとも話していた。

聴力がこの子よりもいいからコミュニケーションがよくとれるということは決してないようだ。その子がことばを話したいという意欲や周囲の人たちが温かく見守ってくれることが大切である。

## (2) B児を中心とした低学年の頃の様子

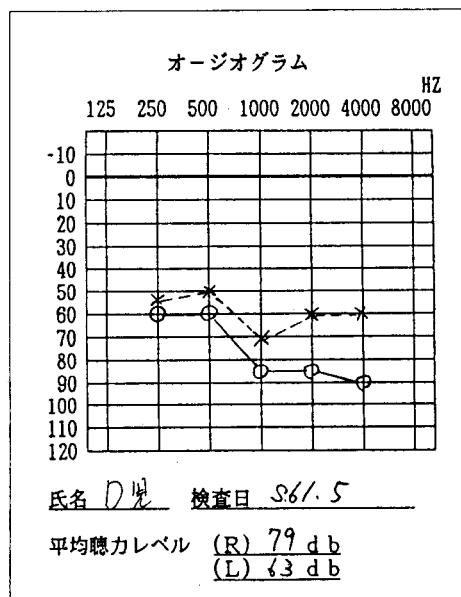
### ア 入学当初の親たち

3人の子供達のどの親も最初にいう言葉は、「勉強の方はどうでしょうか。」ということであった。子供達がクラスの中に入りうまく適応して行けるかどうかなどは、全く眼中にない様子であった。親達は、難聴という聴力障害がどれほど子供の人格形成に大きく影響を及ぼしてくるのか気づかない様子であった。

### イ B児が骨折

入学してから教室の中でもとりわけ落ち着きのないB児は、いつもふらふらと動き回っている。そんなB児が遊具(富士山)から落下して、右肘を複雑骨折する事故が起きた。遊具そのものにも危険性はあったが、無謀な遊び方による事故であった。この頃のB児には、危ないとか、恐いなどという意識など全くないのではないかと思われた。

この件以来、B児の母親は今までに起こしてきた色々な事故について話してくれた。その中でも、B児は自転車による飛び出しをよくすることがあり、自宅前で自動車が急ブレーキをかけることがたびたびあったという。周りの状況を確かめることなく動きだしてしまうだけに細心の注意が必要な子供である。



#### ウ 3人の遊び

B児、C児、D児ともよく遊ぶ子供である。問題なのはいつも3人で遊ぶことであった。クラスの仲間とうまく遊ぶことができないでいた。ことばがうまく話せず、相手の言っていることが十分に理解できないために遊ばないのか、原因ははっきりとはしなかった。ただ3人は就学前よりお互いによく知っており、気心が分かっているだけに他の友達と遊ぼうとしなかったのかもしれない。いつまでも3人だけで遊んでいたのでは、難聴学級に入った意味がなくなってしまう。お互いの人格形成にいいことはない。学級担任と協力して他の子供達と遊ばせるように仕向けることにした。

#### エ B児が水痘

水痘のために学校を休んでいるB児。母親がそのことで勉強の遅れを心配しました。親にしてみると、4～5日休むことが大変に他の子供より勉強が遅れてしまうと錯覚してしまうようだ。

子供に聽力障害があるだけに一日たりとも無駄にできないという気持ちは素晴らしい。しかし、こういった意識過剰が子供に悪影響を及ぼさなければいいのだが。

#### オ B児の言うことを聞いてくれないD児

休み時間にB児がD児の顔を平手で叩き、鼻血が出た。自己主張の強いB児にとり、自分の意見をきちんと聞いてくれないということはプライドを傷つけられたことになる。那么に、B児は腹を立てD児を叩いたようだ。この頃より、自分の意見とは全く反対の意見などを言うと、興奮状態に陥ることがよくみられるようになった。

#### カ 友達とのもめごと

学級担任から休み時間に友達を蹴ったり叩いたりしているという連絡が入る。学級担任はクラスの子供達に「B児はお友達が欲しいのでああいうことをしてしまうのだから、みんなは許してあげてください。」というように話してくれて、この件は決着がついた。

その後、気持ちが落ち着いたB児と話したところ「ぼくの言っていることを聞いてくれない。ぼくのことをばかにしたからやった。」というように話してくれた。B児のことばの不明瞭さに加え、正しく相手のことばを聞き取れないもどかしさがこのようになってしまったと考えられる。母親に話したところ、家でも同じようなことがあるということであった。

#### \* B児の幼児時代

難聴という障害を持っているということで、外に出して遊ばせると危険も大きくなると考え、家の中もしくは庭の当りで過ごさせていたようだ。また、近くに同年代の子供がいなかったので一人遊びが多く、友達ができたのは、ろう学校の幼稚部に行くようになってからだという。幼児時代の生活環境が現在のB児の人格形成に大きく影響しているようだ。

#### キ D児のひとこと

3人の子供達の中でいつもリーダーシップをとっているのはB児だ。そのB児の後を言

われたままについて行くのは、いつもD児である。そんなD児がある集会活動が終わった後でポツリと話した。それは「つまらない」ということばであった。誰に対してもにこやかな表情を崩さないおとなしい性格のD児が、自らはっきりとしたことばで言った。今まで自分から意思表示をほとんどしたことがなかっただけに驚かされてしまった。集会活動のルールがよく分からず、ひたすら友達の後について回っていたことが、その大きな原因であった。本人にしてみれば、活動の時間がさてかし長いものに思っていたと思う。健聴児であってもルールが分からないと面白くないものである。事前にD児には活動の内容を十分に知らせておくべきであった。このことがあってからというものD児は苦手な口話を補うかのように筆談をよくするようになってきた。

#### ク テスト用紙を親に見せたがらない

B児は近頃テスト用紙を家に持ってこないと母親が言い出した。母親と相談しているうちに原因がはっきりとした。母親が気づかないうちに子供に対して「どうしてこんな問題が分からないの」というようなことを、何度も聞くべきであった。このことがあってからというものD児は苦手な口話を補うかのように筆談をよくするようになってきた。

子供なりに精一杯努力しているのに、テストをもってくたびに文句を言って、親の権威をちらつかされたのでは子供はたまたものではない。母親の焦りがしらずしらずのうちに、子供を追いつめていったようだ。

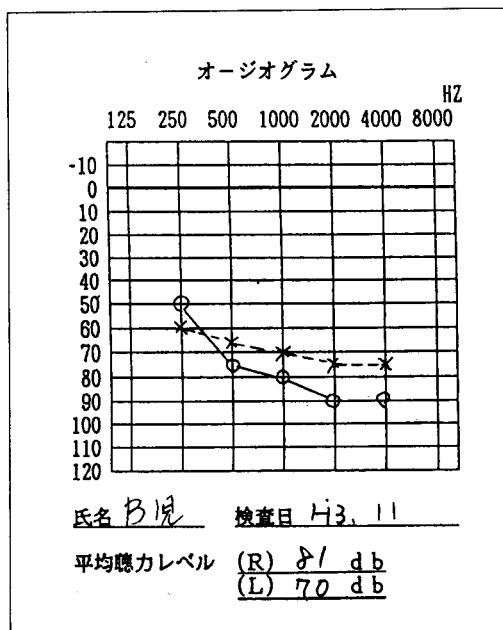
#### (3) 中、高学年時代のB児の行動

##### ア とけこめないB児

新学期を迎える学級編成が行われた。今までは、C児と一緒にクラスで何かにつけてC児と遊んだり話したりした。ところが、今年度からは、クラスの中にC児もD児もない。一人ぼっちになってしまった。そのことが原因なのか分からないが、B児はクラスの誰とも遊ぼうとしなくなった。そればかりか、隣のクラスの二人とも口をきかなくなってしまった。

学級編成によって気の合う仲間が隣りのクラスに行ってしまったことが、B児の心を閉ざしてしまったのだろうか。休み時間にさそっても遊ぼうとはしない。

健聴児でも学級が変わると今まで遊んでいた子と遊ばなくなることはよくある。B児の性格的なこともあるが、クラスの仲間との対人関係にも難しい問題があるようだ。



#### イ 写生大会の中で

C児、D児は他の子供達と一緒に画用紙に下絵を書き始めた。しかし、B児は30分たっても何もしない。学級担任のところに「鉛筆をなくした」とかいって、いっこうにやろうとはしない。周りの様子をきょろきょろしながらうかがっている。1時間位過ぎた頃やっと描き出した。

クラスの中で孤立して精神的に不安定な状態になってしまっているようだ。

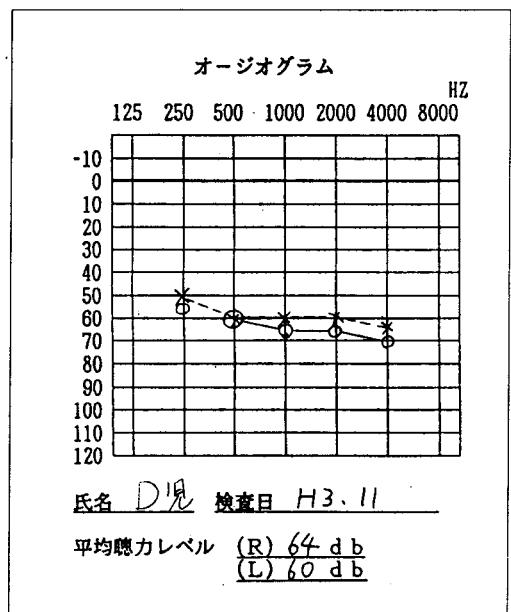
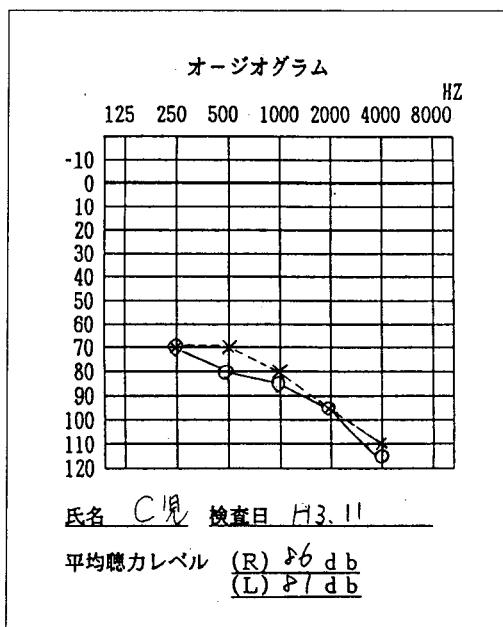
#### ウ 担任が変わる

学級担任が変わった。今までの先生とはまた雰囲気が違うのだろうか。B児は益々落ち着きがなくなっていた。しばらくしてB児は教室から姿を消して、卓球室へ入り内側より鍵を掛けて出てこないということが起きた。B児が落ち着いた頃にそのときのことを聞いても全く答えてはくれなかつたが、担任の先生やクラスの仲間との些細なことばのやり取りがこのような行動にまで発展してしまつたようだ。ことばが十分に聞き取れず、相手にも正しく伝えられないことがなんといつても大きな原因の一つだ。難聴児と話すときは、よく聞き取れなかったら紙に書いて筆談したり、優しいことばにおきかえて話すことが大切である。また、分かったような相づちをうつと誤解の原因になることがある。分かりあえるまで、正面に立ちじっくり話し合うことが必要である。

#### エ 図工の時間に

画用紙を持っていく係から、画用紙は持っていないからいいんだと言われる。たまたまその近くで話をしていた友達が自分の悪口をいっていると勘違いをして、その子の首の当りをつかみけんかとなつた。相手は、一体なんのことやら分からず驚いてしまつたということであった。

B児には、その場の状況を詳しく説明して分からせようとしたが、悪いことはしていないと言うばかりで何も話そうとはしなかつた。クラスの中で適応できないために不信感が強まりこのような行動となつた。



## おわりに

(1) ここ数年間の入級児童数の激減は、全県的に起きている。それだけに入級に対しての対策が重要な課題となっている。同時に、入級してくる児童の障害の重度化は著しく今後益々ろう学校及び医療機関等との連携が重要になってくる。特に、就学においては、難しい問題も多く、保護者の理解が何よりも大切である。同時に難聴学級の良さをより多くの方に知ってもらうことも重要なことである。

### (2) 通常学級における難聴児に対しての対応

ア 難聴児であることが分かったら、一日でも早く難聴学級や医療機関を紹介して検査、診断を受けることを保護者に勧める。また、近年、ろう学校では、0歳児からの相談を受け付けており、早い時期から適切な指導（補聴器の使用の仕方、補聴器を使っての聴能訓練など）が受けられるようになっている。

\*聴能訓練・・・失われた聴力を取り戻すことでなく、「残っている聴力」を活用しコミュニケーションがうまく取れるようにすること。

内容・・・音に注意を向ける習慣を身につけさせる。／音や語音の違いを弁別させる。  
／補聴器をつけて増幅音に慣れさせる。／ことばを理解する力を伸ばす。  
などである。

イ 難聴児の座席は、教師の声が聞き取りやすい位置（前列から2番目くらい）に座らせ聞き取りやすい話しかけ方に心がける。

① 両児の聞こえ方に差があるときは、よく聞こえる耳が教師の話をする場所に向くような位置がよい。

② 口元がよく見えるように、心もちゆっくりはっきり話しかける。単語の形で話しかげずに文の形で話しかける。

③ 話す場合は、黒板に向かって話したり、突然その場と関係ない不用意なことを話しかけない。また、話が理解できないときは繰り返して話す。

(3) 難聴という障害をもつことによって相手の話すことばがよく聞けなくなり、また理解することも大変難しくなる。そのことが、益々ことばの発達を遅らせていくことになる。同世代の児童と比べても表現力、理解力には大きく差が出始め学習内容が分からずついていけなくなったり、同学年の友達からばかにされると言うことも考えられる。さらに正しく聞くことができないために発音がおかしくなってしまう。行動面においても、反応が遅かったりとんちんかんな行動をとることがみられるようになる。そのことが歪んだ人格を形成させてしまうことになる。それだけに障害をもつ児童にはよりよい環境を提供して、正しい方向に導いてやることが何よりも大切である。

ここに載せた難聴児達の指導記録が、難聴学級に在籍している子供達ばかりでなく通常学級に在籍している難聴児の指導に少しでも役に立つことができれば幸いである。

## 評

相生小学校難聴特殊学級（きこえの教室）は、足利市就学指導委員会で、難聴特殊学級で教育を受けることが望ましいと判断され、かつ保護者が入級を希望する児童で構成されております。その在籍者は、平成4年度現在1名でありますが、平成5年度からは在籍が0となり学級がなくなります。しかし、特殊学級で教育を受けている者以外にかなり多くの障害のある児童生徒が通常の学級に在籍し学習しております、通常の学級の先生方に障害児に対する正しい理解と認識をより一層深めることが必要であります。

聴覚障害とは、器質的あるいは機能的障害があって聞く能力が一時的または永久的に低下しているか、欠如している状態を言います。このような状態が起こると、言語発達、コミュニケーション、情緒や社会性の発達などの面で様々な問題が発生します。

以上のこと踏まえ、本実践研究は、人格の形成期にある聴覚障害の児童に、よりよい環境を提供し正しい方向に導くことを目指したものであります。そして、コミュニケーションがとれる場合とそうでない場合の二つの事例を通して、通常の学級における障害のある児童生徒の指導に役立つものであります。

具体的には、コミュニケーションがよくとれるためには、児童がことばを話したいと言う意欲を高められるよう周囲の人達が温かく見守ってあげることが大切であること、難聴という聴力障害が子供の人格形成に大きく影響を及ぼしていることを踏まえ、小さなトラブルでも十分に配慮をした教師の援助が必要であること、また、ことばがよく聞き取れなから筆談したり、正面に立ってやさしいことばに置き換えて話すことなどについて難聴児の実態を細かく把握しての実践の中から述べられています。

本研究の、児童の障害の状態を見極めながら、学校生活や日常生活がよりよく営める子供に育てようとの適切な援助指導に心から感謝申し上げるとともに、この研究の趣旨が通常の学級においてますます拡大していくことを願ってやみません。